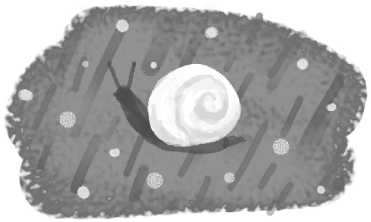
岳　6　月

宮坂静生
推　　薦

土佐文旦たむらちせいの山河恋ふ　佐藤映二
一生みな残り生（よ）のやう花山茱萸　国見敏子
朧夜のカフェに傀儡のあつまれる　上村敦子
難民に果てなき地べた鳥帰る　矢島　惠
マスクしてムンクの叫び押し殺す　岩井かりん
余生なり天蛇（てんばう）と呼び海に入り　眞榮城いさを
陽光の木の芽残らず毟りたき　海野恵子
雲雀野や発条工場の直方体　佐藤きく
山焼の夜やダ・ヴィンチのフレスコ画　田川節子
死の際の連呼夜桜連綿と　矢島栄子
浮氷触れ合ふ音やポロネーズ　新村洋子

*

雛霰軍服を皆桃色に　宮澤和子
蠅生る霓（にじ）の翅もて天真に　木村安以
蒲公英の絮のやうなる納棺夫　有手　勉
紫雲英田に隠るる吾子を探しをり　冨岡詔子



パンジーは万人の貌もちにけり　豊山れい子
啓蟄や青人草の我が胸も　志摩晴樹
顎の骨一つが屍春の果　吉澤利枝
梅ひらき家やはらかくなりにけり　久根美和子
春の雪帳尻合はすやうにかな　丸山公子
後悔の己が一途に牛蒡引く　宮川志津子
春愁やオランウータンの為の曲　島田葉月
新緑に小さかりける踏鞴（たたら）かな　嶋津孝子
日を満たし乾杯待ちのチューリップ　松本よし乃
温みまだ残る旋盤夕ざくら　田中とし子

*

地球には毛穴がありて土筆坊　珠凪夕波
三度目の立夏や歳時記の付箋　三水芽生
自己主張することのなき春の星　峯　敦子
春だもの所帯もつたか団子虫　青木孝夫
水温む見えない敵に手を洗い　荒木　仁

岳の源泉　六月 (490)

―同人集・岳集・青雲集から

宮坂静生

はじめに。コロナ禍の見えない敵にマスクの仮面を被り、唐突な死に脅える。現代社会の見事な断面だ。籠居で余裕ができ、考えた。コロナ禍以後の社会は今まで以上に暮しに矛盾が生じ、クレバス（深淵）が生まれる。情報合戦により、暮しはますます煽られる。仮想的になる。気をつけないと生活が粗雑になる。その防衛としてどうしたらよいか。農業・漁業・林業など第一次産業の自然を相手にする仕事への関心を高めることをお勧めする。そこには、気働き、繊細な思いやりがある。飛躍したいい方になるが、我々は地球から貰うことばかりしてきた。自然は、享受するばかりでなく、施す気持が必要なことを教えてくれる。施肥・植林・養魚など。土も木も海も大事に育む。お返しをする。素朴な環境を守る。それが気働き。そこに暮しの充実感がある。

たむらちせいの山河―土佐びとの朴訥さへの憧れ

土佐文旦たむらちせいの山河恋ふ　佐藤　映二

たむらちせいは日野草城・伊丹三樹彦に師事。高知の中学の先生。人情抜群。骨太な俳句が繊弱な都会俳句を寄せつけない魅力があった。信州大好きなので親しくなったわけではないが、互いに憧れ五十年余り。先年、四万十市俳句大会で亀井雉子男・垣内みか夫妻を仲にお会いした。生涯の出会い。二〇一九年十一月九日逝去、九十一歳。「豆ごはん愛の言葉は無尽蔵」が末期近い句。いつか「ちせい論」を書きたい。土佐文旦は上々。

一生みな残り生のやう花山茱萸　国見　敏子

来し方が愛しいという。ここまで生き、改めて残生のように顧みる。一生が余生のごとし。付け足しだというのではない。ごちゃごちゃした山茱萸の花は地味。わが生涯は平凡。しかし、生きた証の一齣一齣が大事に思われる。作者は付け足し感を句にしたのかもしれないが、明るく行こう。

朧夜のカフェに傀儡のあつまれる　上村　敦子

「傀儡」を「くぐつ」と読んだ。カフェを三音に読めば「でく」。意は遊女ともとれるが、あやつり人形の芸人。まあどちらかというと役立たず。でくのぼう。どうだろうか。

難民に果てなき地べた鳥帰る　矢島　恵

つねに問題意識旺盛な作者。「地べた」は本来共有なもの。ところが、いまや国相互の争いのもと。鳥の世界との違いが人類の見苦しさ。決して智恵者ではないことを思わせる。

マスクしてムンクの叫び押し殺す　岩井かりん

叫びたいのだが、叫べない怖さ。じれったさ。現代とは。

余生なり天蛇と呼び海に入り　眞榮城いさを

「天蛇」は虹。虹が水を飲む怪物だという中国古代の伝承が宮古島には伝わる。島の淡々たる日常詠か。上五が自然。

今月の秀句

陽光の木の芽残らず毟りたき　海野　恵子

激しい。たらの芽を採るように光輝く山の木の芽を全部毟りたいという不意なる思いを表現した。人は途方もない瞬間の思いを持つ。良識や理性で次の瞬間には抑える。俳句は瞬間の思いを掬い上げる。衝動にかたちを与える。力がついて来た作者。「岳」の事務一切を処理してくださる力量も快調。

雲雀野や発条工場の直方体　佐藤　きく

「直方体」が発条を連想させる。雲雀も発条仕掛けに照応。

山焼の夜やダ・ヴィンチのフレスコ画　田川　節子

夜の山焼きの野生に、ダ・ヴィンチの壁画の照応が巧み。知的で、おどろおどろしさもある。東西文明融合の作のようだ。

死の際の連呼夜桜連綿と　矢島　栄子

臨終には最後の声掛けをする。病室の窓から盛んな夜桜が見える。残酷な光景であるが、人生は非情だ。夜桜が慰め。

浮氷触れ合ふ音やポロネーズ　新村　洋子

どこに浮氷があるのか。湖沼か。おだやかに触れ合うが、ショパンのポロネーズは激しい。お洒落な連想だ。

青人草とは民草、蒼生、人民の意。古語を生かすのも連想が拡がる。

啓蟄や青人草の我が胸も　志摩　晴樹

「青人草」は『古事記』に出る古語。掛詞風な面白さに感心した。地虫出る候、民草のわが胸も草萌え。まさに古事記

でも読む感じ。こんな歌謡風な俳句は珍しい。国文学のプロ。

蠅生る霓の翅もて天真に　木村　安以

蠅の誕生を寿ぐ。「天真」は飾り気がない。蠅が虹色の翅を動かしながら自由に振る舞う。虹に「霓」と凝った字を用いた。嫌われものとの先入観をもたないで、蠅の観察が楽しい。

蒲公英の絮のやうなる納棺夫　有手　勉

通夜などで納棺を支える納棺夫。そんな表現も珍しい。職業柄行き届いたやさしさがある。比喩の意外性がそれとなく季節感も暗示して、万事こともなく進む弔いが想像できる。

今月の秀句

雛霰軍服を皆桃色に　宮澤　和子

アニメーションの世界で「桃色軍団」とか、軍服を桃色にする物語があるようだ。雛霰との取り合わせがどこか漫画風。世代により軍隊のイメージが違う。軍服を桃色にすれば戦意なんか喪失するという思いか。大胆な新風俗俳句として関心をもつ。極めて意欲的。探求心ある新進として注目される。

紫雲英田に隠るる吾子を探しをり　冨岡　詔子

亡くなった吾子の面影が忘れ難い。類想感があろうが、それだけ普遍性が生まれる。春が来るごとに妄執のように吾子を思う。紫雲英田のどこかにいる。切ない句だ。

パンジーは万人の貌もちにけり　豊山れい子

冬越えをし、春どこにでもあるパンジー。いつもいつもにこやかに。それが万人向き。見慣れてはいるが飽きない。

顎の骨一つが屍春の果　吉澤　利枝

前書「三・一一より九年」とある。見つかったのは顎の骨だけ。それでも運がよかったと慰める。日々疎くなる世上の変転の中で、罹災者に暮春はやりきれない思いの季節だ。

梅ひらき家やはらかくなりにけり　久根美和子

梅が咲いた。冬の家が柔らかくなった感じ。これが春。

春の雪帳尻合はすやうにかな　丸山　公子

冬はからから。立春過ぎに雪が来た。これで天帝も帳尻合わせかと、俗界ではもっぱらの話題。川柳風の軽み。

後悔の己が一途に牛蒡引く　宮川志津子

あちらがだめならこちらで。これが庶民感覚。気になっていることの埋め合わせのように力を入れて牛蒡を引く。人にはわからない、自分だけの心の始末を詠む。

春愁やオランウータンの為の曲　島田　葉月

動物園飼育係もご苦労さん。これも仕事、それでもしんどい。珍しい春愁の句と評価する。因果関係がないのが取り柄。

新緑に小さかりける踏鞴かな　嶋津　孝子

親方ひとりに女房。小さな足踏みのふいごを今も重宝にして、僅かばかりの仕事をこなす村の鍛冶屋さん。新緑が素朴。

日を満たし乾杯待ちのチューリップ　松本よし乃

チューリップを乾杯のグラスに見立てた。遊びの愉しさ。

今月の秀句

水温む見えない敵に手を洗い　荒木　仁

新型コロナウイルス詠。「見えない敵」が恐ろしい。これからの暮しは見えないものを相手にすることになるか。

温みまだ残る旋盤夕ざくら　田中とし子

町工場の春の夕方。桜も満開。今日も精一杯の勤労俳句。

青雲集―地球の毛穴に注目

地球には毛穴がありて土筆坊　珠凪　夕波

地球の毛穴から生える土筆。漫画チック。若手俳句の特徴。擬人化表現に硬い感じがなく、人も地球も丸めて仲間。

三度目の立夏や歳時記の付箋　三水　芽生

俳句を始め三年目の夏。歳時記の付箋を見て。初々しい。

自己主張することのなき春の星　峯　敦子

煌く秋とは違う、ぼーとした春の星座。知的な把握だ。

春だもの所帯もつたか団子虫　青木　孝夫

わが暮しを回想し、団子虫を句にしたのがいい。

他に青雲集から注目した句を掲げる。

引き出しに昔の煙草さくらの夜　青木　義典

桜隠し夫旅立ちし日を思ひ　福田登美子

推敲・添削 ㊺ ●●●●●●●●●● 宮坂　静生

○気になる表現　「春愁」のむずかしさ

かねて「春愁」ほど表現がむずかしい季語はないと思っている。冬が去り、すごしやすい好季節を迎える。人の一生でいうと青春時代。春は何時になってもほのかな青春期を重ねてもの思うためか、そのもの憂さを詠うといかにも物憂くなる。俳句表現の特徴である、さっぱりしたもの憂さ。矛盾した言い方であるがそれを出すのがむずかしい。今月号には春愁詠が八句。その中で一句「岳集」推薦句は次の作。選評はそちらで見ていただきたい。以下は採らなかった。なぜか、いかにも情景が揃い過ぎている。上記のような新味がない。

例句　○春愁やオランウータンの為の曲　島田　葉月

例句　春愁と云へば夢二の画く女
町隠すコロナウイルス春愁う
海を背に奴奈川姫の春愁
ママレードの瓶にうつすら春愁
春愁や誰彼となく消息文
春愁や立山（たちやま）も有磯海（ありそうみ）も常なれど
廃炉とは冥くて遠く春愁ふ

○このように推敲し添削する

語順を替える

例句　春籠りコロナウイルス「デカメロン」　松岡　善郎

添削　コロナウイルス春籠りいて「デカメロン」

「デカメロン」は十四世紀、ペスト流行のフィレンツェを舞台にしたボッカチオの風俗小説の傑作。添削例のように語順を替えた方が連想がふくらむ。だらだらと続けない。

例句　父九十四惚けて笑ふ山桜　芳賀　佳子

添削　父惚け笑ふ九十四山桜
身体的な「惚け」よりも父の余裕の笑いを出せないか。

例句　遠き目の細りし弟（おとと）春の雪　沼井由紀枝

添削　弟の遠目細れる春の雪
「弟」に「おとと」と付くルビをなくし、現在表現に。

例句　刈り込まれ根つこの薔薇も新芽伸ぶ　土屋　隆

添削　刈り込まれ薔薇の根株の新芽伸ぶ
「根つこ」は「根株」の方が写実的。対象に近い表現を。

例句　遠まなざし樫の木を植ゑしとゐひつ　日馬　のぶ

添削　樫の木を植ゑしといひつ遠まなざし
リズムよく表現する。「いひつ」も注意。「ゐ」ではない。

季語が入る方が自然な場合は入れ、有季表現が良い。

例句　コーラスが聞えし校舎今は無し　佐藤　悦雄

添削　コーラスが聞えし春の校舎消え
「今は」の箇所は季語を入れ、他の言い方で生かす。

省略できる箇所は表現を工夫する。

例句　小さき花種息つめて蒔きにけり　大和　悦子

添削　花種を息つめて蒔く日の出前
花種なので小さい。「小さき」が不要。下五を加えた。